

深夜、ガラガラの
電車に乗ることに
ハマってしまった

週に一度、
両親が揃って
仕事が都合で
帰りが遅い日がある

その時に合わせて
家を抜け出し、
制服を着て
電車に乗る……

そんな時間に
乗っているのは
大抵、疲れた様子の
サラリーマンだ

私が乗り込むと
必ず好奇の視線が
向けられる……
向ける時間……
こんな時間に
何をしていた
のか、と

好色そうな目で
思い切り短くした
スカートの太もも
あたりをチラチラと
見てくる……

涼宮ハルヒの
転落

「はー、
あつついわね……」

わざとらしく
そう呟くと、
パタパタとスカートを
つまんで扇いでみせる

他の乗客からは
チラチラと
下着が見えている
はずだ……

驚いたような、
ニヤついたような顔で
ちらちらとこちらを
伺う男性たち……

その視線に
晒されると、
ゾクゾクして
しまう……



(見てる見てる……
きつと今日は
あたしでオナニ
するのよね……)

向けられる
性欲の視線に
自然とこちらも
興奮してしまう……

自分を孕ませ
たがっている
オスたちの
雰囲気……

ドゥフ……

アソコの奥が
ヒクヒクと
メスとしての
生物学的な反応を
返してくる……

ひん……

そんなことを
繰り返すうち
次第に、私は
より強い刺激が
欲しくなってい
った

きつと、大丈夫……
もう少しだけ
挑発してみよう……
もう少しだけ……

今日はスケスケの
きわどい下着で
挑発してみる……

黒のレースで
陰毛の透けた
パンティ……
すっごく小さくて
いやしくて……

穿いているだけで
興奮して
アソコが濡れて
きてしまう……

今日の乗客は
エロそうな中年の
サラリーマン風
が一人か……

ラッキーだったわね
あのおじさん……♡
こんなJKの
エロ下着を見る
ことができて……♡

ほらほら、
もつとよくアソコが
見たいんでしょ？
もつと近くで
見ればいいのに……

「……」

突然だった……
男性がニヤニヤ
しながら近づき、
おむろに胸を
驚かすようにした

ちょうど……
スカートを
めいっぱい
たくし上げていた
最中だった……

思いっきり、身体が
ビクンと反応
してしまった
焦って声も出なかった

頭が真っ白になって
あまり覚えてないが、
しばらく硬直した後、
私はあふたと
次の駅で降りた

家に帰ってから……
何度も何度も
胸に触れた手の感触を
思い出してオナニー
した……

きゅんきゅん
きゅんきゅん

その日以降——
私の体は変わって
しまった……

急に胸のカップ数が
大きくなり……
ブラのサイズが
合わなくなった

仕方なくノーブラで
過ごすようになり
常に乳首に刺激が
走るようになった

ドゥフ……
は……

それだけじゃなく、
気持ちも
身体と同じぐらい
変わってしまった

ぴん……

これまでは
どこか挑発的に……
見られることを
興奮していたが

今では、ほとんど
懇願するような
気持ちで、誰かに
触られるのを
待っている……

ドゥフ……
は……

ちらちらと
媚びるように
パンツを見せ……

ドキッ

ドキッ

誘いに乗ってくれ
相手を選んで、
自分の胸やお尻を
触らせた……

何回か繰り返すと
段々常連さんが
できていった……

ドゥフ……

ドキッ

常連たちとの間で
どんどんプレイは
エスカレート
していった――

ぴん……

周囲に他の乗客が
いないときを
見計らって、脱衣に
チャレンジしたり

そして……
きつと今後は
それ以上の
ことも……



そうして、私は
今日も深夜の
電車に乗る……

常連さんに命令
されるまま、まず
全裸にさせられた

何人もの視線が
胸とアソコに
集中する……

「本当にゴムなしで
いいわけ？
ハルヒちゃん」

そう……
今日はいよいよ……
挿入まですると
約束してしまった

「いい、いいから
はやくしましょ
人が来たら
困るから……♡」

ひんひん

ひんひん

ひんひん

ひんひん

ひんひん

「赤ちゃん
できちゃうけど
いいの？」

ニヤつく常連たち……
内心は、私を
孕ませたくて
仕方ないくせに……

さて……
なんて答えたら
いいかしら……
私の本音は――

「……いいわ♥
おじさんたちの
好きなように
孕ませていいから」

周囲の空気が
変わる……
ギラついたオスの
匂いが立ち込める

私はまた一段、
落ちていく……
どこまでも……

もみ

もみ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

はー

はー

















